

平成 19 年度 海外研修派遣報告書

四谷メディカルキューブ 画像診断科
松浦 由佳

2007年7月23日～27日の5日間、米国Stanford大学にて開催された海外研修に参加させて頂いた。本研修への参加にあたり、当初は米国の現状を知ること、およびその優れた点を自身の日常業務に取り入れていくことを目標としていた。しかし米国の現状などという大きなテーマを1週間という限られた期間で見尽くせるはずがない。帰国した今、正直まだまだ見足りないと感じるのは事実である。だがたとえ研修が2週間あるいは1ヶ月間に渡ったとしても、決してそれを捉えきれることはないだろう。むしろ1週間でそれを垣間見られること、また自分がより深く追究したい点を明確にできたこと、これらは海外へ目を向ける第一歩として非常に大きな収穫であったように思う。Stanford大学の研究員・職員の方々は我々が帰国後に連絡することを快諾して下さり、私は先方のお言葉に甘えて現在も連絡を取らせて頂いている。現地での人脈を得るという、これも大きな成果の一つであった。一時的にその環境に触れるだけでなく、継続的にそれを試みる機会を得られたのだから。

本研修を通じてStanford大学で進められている多くの研究に触れ、米国の先進技術に改めて感嘆した。またその一方で、本邦の放射線技術が世界レベルに決して引けを取らないことも実感した。殊、臨床CTに関してはむしろ本邦が米国の先を行っているようにさえ思えた。それにも関わらず、医療技術に対する両国(民)の評価は大きく異なる。診療報酬を一例に挙げると、米国ではCTやMRI撮影後の3D処理に撮影料とは別のコストが発生する。本邦において一般的に行われている処理と同等またはより簡易的な処理でさえ、明確に評価されているのである。また撮影料自体の価格も本邦より遥かに高く設定されている。これらには両国間における保険制度の差異が背景にあり単純に優劣をつけられる問題でないとは言え、放射線技師という職業を取り巻く環境、さらには医療に対する国民の意識に格差を感じずにはいられなかった。と同時に、矛盾するようではあるが、低コストで高水準な医療を実践する本邦を誇りにも感じ得た。

別の視点から、本研修において印象的であったのは米国人の”時間”に対する価値観である。研修中のすべての講義において、講義は質問までを含めて予定時間内に収められた。さすが、時間内にこなすことを能力とみなされる国である。講義に限らず会議や打ち合わせであっても、時間を延長させることは同席する全員の貴重な時間を無駄に使うことを意味し、能力は低く評価される。”時間は有限資産である”という意識が徹底して根付いているのだという。そんな彼らの貴重な時間を、我々の講義に割いて頂けたことを非常に光栄に思う。そして本研修の同行メンバーとして、様々な分野で活躍なさる全国の皆さんと出会えたこと、また時間を共有する中でやはり多くを学ばせて頂いた事を幸せに思う。

最後に、本研修への参加者(応募者)は皆、国内での積極的な研究および国内外の各種学会での発表実績を持っていると思われる。一方、海外での研究となると機会が限られているのではないだろうか。本研修が研修自体を目的とするのみならず、参加者の各々が将来的に海外での研究を望んだ際に道を切り開けるよう、そのきっかけとなるものであってほしいと願う。そして今回、その機会を頂けた事に深く感謝する。

写真：最終日の修了証授与。本研修の Director である Dr. Michael Moseley と。

